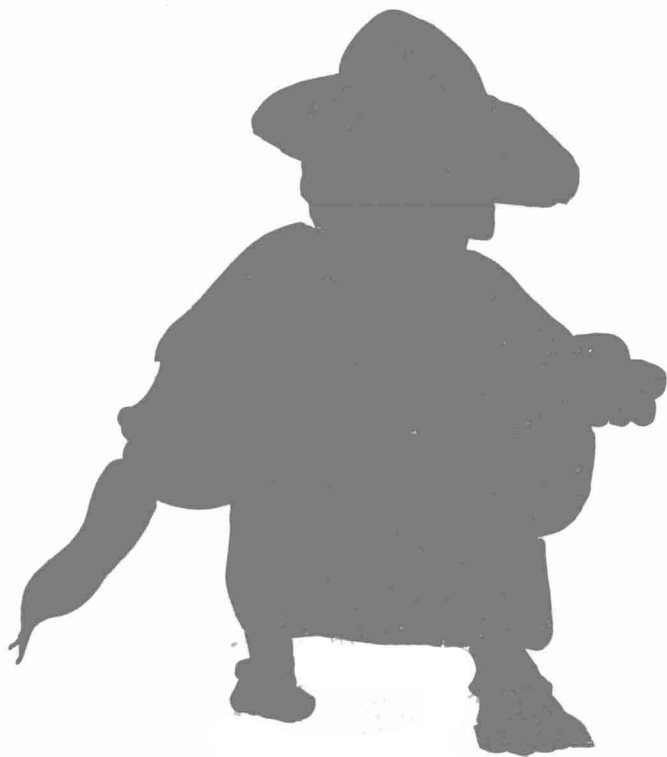


く　ら　り 苦楽利氏どうやら御満悦

高城修三



く　ら　り 苦楽利氏どうやら御満悦



河出書房新社

苦樂利氏どうやら御満悦

一九八七年一〇月二〇日 初版印刷

一九八七年一月一〇日 初版発行

著者 高城修三

装丁者 黒鉄ヒロシ

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三三―二

電話 営業 〇三―四〇四―二二〇一
編集 〇三―四〇四―八六二

振替口座(東京) 〇―一〇八〇二

高城修三(たかしゅうぞう)
昭和22年、香川県高松市生れ。
京都大学文学部言語学科卒業。
『樫の木祭り』で、昭和52年度
『新潮』新人賞を、同53年1月
に芥川賞をそれぞれ受賞する。
『樫の木祭り』の他、主な著書
に『約束の地』『糺の森』、エ
ッセイ『京都伝説の風景』など。

印刷 株式会社亨有堂印刷所
製本 小高製本工業株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価はカバー・帯に表示してあります

© 1987 Printed in Japan

ISBN4-309-00479-2

目次

第一話	苦樂利氏、溜息ついて忍ぶ恋の結末を知ること	5
第二話	苦樂利氏、クロレラの至福を夢見て山中に迷うこと	21
第三話	苦樂利氏、美味なる卵を求めて雄鶏に焦れること	39
第四話	苦樂利氏、にわかに一反百姓を志すこと	57
第五話	苦樂利氏、冷蔵庫は文化の敵と断じること	75
第六話	苦樂利氏、ゴミの山に分け入って惑乱すること	93
第七話	苦樂利氏、やみくもに自給宣言を発すること	111
第八話	苦樂利氏、バイクを盗まれて人類恐竜説をぶつこと	129
第九話	苦樂利氏、ドブロクの密造をこころみること	147
第十話	苦樂利氏、核戦争におびえて庭に池を掘ること	165

第十一話 苦樂利氏、ひとり年越しソバを打つこと

183

第十二話 苦樂利氏、細君の反乱に困惑すること

202

第十三話 苦樂利氏、家路を急いで雪中に遭難すること

第十四話 苦樂利氏、死線をさまよって楽園に遊ぶこと

240

221

苦^く楽^ら利^り氏^しどうやら御満悦

第一話 苦樂利氏、溜息ついて忍ぶ恋の結末を知ること

苦樂利氏は憂鬱であつた。もう何日も前から、はた目にもそれと分かる憂鬱に落ち込んでいたのである。その顔付きは、天が今にも崩れ落ちてくるのではないかとあらぬ妄想を抱いてついに後世の笑いものになった杞の国の暇人を想わせたが、苦樂利氏と長い付き合いのある人なら、そんなことは珍しくも何ともないのであつて、むしろ問題は、熱を孕んでふくれあがつた溜息が時おり不用意に吐き出されることにあつた。これには、「樂天家」と書いた札を首からぶら下げて毎日を暮らしているような細君の夢子さんでも、いささかの不安を感じないわけにはいかない。「近ごろの苦樂利氏、なんか変だよ」

節税のためと称し、苦樂利氏のなりわいである物書き業の専従者として自ら税務署に届け出ている手前もあつて、一日一回、苦樂利氏の書齋に、つまり精神の拷問部屋にコーヒーを運んでくる夢子さんが、それとなく妊娠七カ月のおなかを突き出して言つた。間近な比叡山を窓の外にぼんやり見ていた苦樂利氏が、返事がわりの溜息をコーヒークップの置かれた机の上にもらした。「なんか気になるんだワ、その溜息。ねえ、もしかしたら恋わずらいでないの?」

苦樂利氏はもう一つ溜息をついた。屈託のない声で名古屋なまりの無神経な冗談を言われると、

ふさいだ気分が余計に落ち込んでいくのだった。しかし、そんな苦楽利氏の気持ちを少しも意に介さないとところが、夢子さんの人にすぐれた性格であった。

「溜息なんかでしらばっくれて、素直じゃないんだから。ほら、何べんも東京から電話をかけてきて、あげくのはてにウチまで押し付けてきた綺麗なひと」

「ああ、吉子さんのことですか」

と物憂い声を上げた苦楽利氏の頭上に、思いがけず、

「やっぱり、そうだったのね」

と、夢子さんの尖った声がかぶさってきた。七カ月にしては大きくふくらんでしまった腹が苦楽利氏のすぐわきで無気味に波打っていた。苦楽利氏がもう少し視線を上げると、嫉妬のあまりに鬼女となりロウソクをともした金輪をかぶって山深い貴船神社に丑刻参りをしたという宇治の橋姫ほどのすさまじい形相ではなかったが、いつものにこやかな目はすでに形を変えて吊り上がっていた。

「だいたい、電話をかけてきたときから狎れなれしかったんだわ。ちゃんと姓を名のるのが礼儀ってものなのに、いけしゃあしゃあと、吉子と申します、なんて言うんだから。それも、初めて口をきく私にだよ、妻たる私にだよ。そのうえ、東京からこんな山のとっぺんまで押しかけてくるんだから。いったい、どういう関係なんだヨ」

「へ、編集者と、さ、作家の関係ですよ」

夢子さんの剣幕にたじろいで、苦楽利氏は計らずも吃ってしまった。それが夢子さんの疑惑を三倍くらいに増幅したことはまちがいない。

「若い美人編集者と中年の貧乏作家は、ファースト・ネームで呼び合うことになっているのか」
三十五歳の駆け出し作家である苦楽利氏は、『貧乏作家』の雑言は甘受するとしても、『中年の』という形容に抗議する正当な権利を有していると思うのだが、口をついて出てきたのは別の言葉だった。

「ファースト・ネーム？」

「そうだヨ」

「ファースト・ネームというのは、苗字ではなくて、名前の方でしょ」

「当たり前でないの」

夢子さんは名古屋なまりのいらだった声を上げて、何やら不審そうな苦楽利氏の脇腹に出張った腹をぐいと押しつけてきた。

「さっきも、吉子さんて親しそうに呼んだじゃないの」

「なんだ、そんなことですか」

苦楽利氏は胴長の上体を背もたれにあずけて、文筆生活にはいつてから金のかわりに脂肪をたくわえはじめた下腹を、きゃしゃな両手でいとおしそうになでさすりながら、緩慢な動作で夢子さんの勝気そうな顔を見上げた。苦楽利氏の上目づかいになった表情はどこか土臭い蛙を想わせないでもなかった。その口元がゆるんで、苦笑がもれた。

「なんだヨ」

夢子さんは腹のふくれ具合を競うように背筋をのばしたが、詰問する声に先ほどの勢いがなかったのは、久しぶりに見た苦楽利氏の笑顔にとまどったからにちがいない。

「吉子さんというのは、ファースト・ネームじゃないんです」

「ん？」

夢子さんは濃いまゆをきつく内に寄せて、思いがけない事態の急変に何とか心理的バランスをとろうとあせっていた。苦楽利氏はこんなときに夢子さんが見せる困惑の表情にたまらない快感を覚えるものだが、今日にかぎって鬱陶しい感じがしないでもなかった。

「ちょっと珍しいけど、苗字なんです」

と念を押しながら、その正当性を証明したいばかりに、苦楽利氏は机の抽斗をあけ、ひそかに隠し持っていた淡いピンク色の名刺を取り出した。そこには、「吉子さつき」とあった。

「そうよね。初めて電話してくるのにファースト・ネームだけ言うなんて、おかしいわよね」

名刺を手にした夢子さんの声と表情は、もう普段の調子にもどっている。結婚して七年、この素早すぎる感情の変化に、苦楽利氏はずいぶんとまどってきたのである。

「あなたは、そっかしいから」

「そう。母親ゆずりなの」

と屈託のない夢子さんの声には、まるで反省が感じられない。苦楽利氏でなくとも、つい溜息の一つも出してみようというものである。

「また、溜息なんかついて、悪い性格だよ。ほら、原稿用紙が真っ白でないの。もうすぐ母子四人が苦楽利氏にぶら下がることになるんだから、命がけで書いてよ」

夢子さんは机の上をのぞきこんで苦楽利氏の肩を思いきり叩いた。その拍子に、吉子さんから依頼された長篇書き下ろしの一件が苦楽利氏の喉から飛び出してしまった。

「あら、そんな話があったの」

仕事の話が舞い込んでくれば、内容のいかんにかかわらず三十センチも躍り上がって喜ぶのは夢子さんの特権になっていて、その分、のちに苦楽利氏が拷問部屋で頭をかかえて沈み込まなければならぬことになるのだが、話が一週間も前のことだったためか、あるいは七カ月の腹が重すぎたからなのか、夢子さんは一センチも跳び上がる気配を見せず、

「でも、締め切りなしの催促なしたのは、いけないわね」

「脱稿したら、こちらから連絡することになっているんです」

と弁解しながら、苦楽利氏は夢子さんが手にしている名刺を受け取ろうとした。

「こういうものは、一切、専従者の私があずかります」

夢子さんは苦楽利氏の手をぴしゃりと打って、妊婦服の胸ポケットに名刺をしまいこんでしまった。

「締め切りを短くして、どんどん催促してもらわないと、小説家なんて仕事しやしないんだからいいこと、苦楽利氏の仕事は、句読点を一つ入れただけでも何円かのお金になる有難い商売なんだよ。私なんて、昨日の晩、名古屋の友達に便箋十三枚もめんめんと生活の苦労を書いたけど、お金がもらえるところか、切手代や何やかやで大変な持ち出しよ」

「あのね、小説というのはですね……」

「分かってるって。ムツカシーものなんですよ？ 頭の毛を掻きむしって、乾いた雑巾をしぼるみたいに、言葉をひねり出さなければならぬんですよ？」

「あのね……」

「それも分かつてるの。作家はコーコツとして、われとわが身を打つ社会の木鐸とならねばならない、でしょ？」

「……………」

苦楽利氏はもう口をはさもうとはしなかった。夢子さんにかかる、かつて苦楽利氏が口にした言葉もひどく安っぽく聞こえてしまうのだ。

「それじゃあ、売れるはずないワ。小むつかしいのよ。ダサイのよね」

夢子さんは自分の言葉が夫たる苦楽利氏をいかばかり傷つけたか知らぬげに、七カ月の胎児を抱きかかえるようにして、のっそり書齋を出ていった。嘘八百を書いて金をとる小説家など詐欺師のたぐいと思っっている健康な妊婦の後ろ姿を、苦楽利氏はたえようもなく憂鬱な溜息で見送った。

そのときだった。こちらをきつと見すえた吉子さんの妖しい美しさが、苦楽利氏の鬱屈した脳裏に満開の桜のようにひろがったのである。「苦楽利先生を尊敬しております」と言った吉子さんの言葉が伴奏のように響いていた。つい先ほどまで吉子さんを恋の対象として意識していたわけではなかったのに、突然、苦楽利氏は熱いときめきを覚えてしまったのである。

苦楽利氏は気持ちをとりのおして原稿用紙に向かった。吉子さんから依頼された長篇書き下ろしである。何を書くべきかは、原稿を引き受けたときに決まっていた。この一年、いや、もう何年にもわたって苦楽利氏を悩ませてきたことを、そっくり投げ込んで一篇の小説に仕立て上げさえすれば、そこにたぐいまれな傑作が誕生するはずであった。

ところで、苦楽利氏を悩ませてきたものとは何なのか――、そのすべてについてここに書き記

すことは、残念ながら不可能である。それというのも、苦楽利氏は朝夕たっぷり三時間を費やして新聞を読み、記事はおろか広告からテレビ番組に至るまですべての活字に目を通し、NHKしか映らないテレビでひたすらルポルタージュとドキュメンタリー番組を視て、そこに現れてくるありとあらゆる現代の問題に、杞憂し、憤慨し、懊悩してきたのであるから、いわば現代のかかえた悩みの全体が苦楽利氏の悩みであり、それを列記しようとするなら、数年分の新聞を丸ごと引き写しても追いつかないということになるのである。

ともあれ、苦楽利氏はそうしたすべての問題を細大もらずにあつかい、現代文明と人間のありように警鐘を鳴らす、複雑にして単純、怪奇にして明快な小説を書くという壮大な意図を持ってしまったのである。情報の洪水に溺れ、その能力に余る仕事を身のほど知らずにも引き受けようとしたことが、苦楽利氏の絶えざる憂鬱の一因であつたことは疑いない。

苦楽利氏はまだ一行も書いていない。書けないのである。真っ白い原稿用紙をいたずらに憂鬱で塗り込めてみると、そこに、ふっと、吉子さんの面影が浮かんでくる。苦楽利氏は室温にまで冷めてしまったコーヒを一息に飲みほした。苦^{にが}かった。夢子さんが砂糖を入れ忘れていたのだ。「忍ぶ恋だ」

と苦楽利氏は声に出してつぶやいた。胸が熱く、苦しかった。どうやら、苦楽利氏は、たった一度まみえただけの、しかも長篇小説が完成するまで会うことのない美人編集者を、永遠の恋人にしてしまったらしい。この責任の一半は、うかつに嫉妬して苦楽利氏の抑圧された願望を呼びさましてしまった夢子さんにも、なくはない。

ところで、二時間にわたった苦楽利氏と吉子さんとの会談は、文学に特別な意味など全く感じない、いたって健康な精神の持ち主である夢子さんの興味を少しも惹かなかったし、将来、いかに詳細な日本文学史にも絶対に採録されることのない代物だったが、苦楽利氏にとっては極めて意義深いものとなった会談のさわりくらは、是非ともここに書き留めておかねばならない。

会談の前日、東京のさる高名な出版社の編集者を名のる吉子さんから、二度目の確認の電話がはいった。その出版社と苦楽利氏の間には縁もゆかりもなかった。だからというわけではないのだが、京都駅から比叡トーピアまでの交通を訊かれた苦楽利氏は、おりからの憂鬱も加わって、とても、ややこしい京都のバス路線を説明する気分ではなかった。

「新幹線を降りたら、タクシーに乗って、比叡トーピアと言えば、分かります。私のうちは比叡トーピア六の七の四です」

と言った苦楽利氏の口調が不機嫌なものでなかったとしたら、電話の声が妙齡の女性編集者であつたからに他ならない。

「あの、タクシー代はいかほどかりますでしょうか」

大出版社の編集者であるにもかかわらず、自腹を切らねばならないと言いたそうな女の声に、さしたる気持ちのひっかかりも覚えず、

「二千円です」

と即座に答えた苦楽利氏は、京都駅から我が家までタクシーを使ったことなど一度もなかったのである。あるいは三千円かかるかも知れないと思ったが、訂正するのもおっくうだし、何よりも、タクシー代を少しでも高く言って複雑なバスの乗り降りを東京の人に説明しなくてはならぬ

事態におちいることを恐れていたのだ。

翌日、約束の時間に吉子さんが訪ねてきたとき、原稿用紙を前にして相変わず鬱屈していた苦楽利氏は、

「東京から例の編集者が来たよ」

と夢子さんに取り次がれても、何やら不審顔であった。それでも東京からきた編集者と聞かされれば、駆け出し作家の苦楽利氏はたちまち条件反射を起こして、顔から憂鬱の色を消し去り、客間へ急いだのである。初めに吉子さんから名刺を手渡されたはずだが、そのあたりの苦楽利氏の記憶は曖昧である。と言うのも、部屋にはいったとたん、吉子さんの美貌に目を奪われてしまっていたからである。

「タクシー代、二千元をだいぶん超過しましたわ。二千四百八十円になりましたよ」

と切り出されて、苦楽利氏は、初めて、前日の電話の声と目の前にいる美人編集者が一つに結びついたのである。のっけからタクシー代の話をする編集者も珍しかったが、

「四捨五入すると二千元ですよ」

と、咄嗟に答えてしまった苦楽利氏の対応にしても、思いがけない美人を前にして緊張していたせいばかりではあるまい。歯車が噛み合ってしまったのである。苦楽利氏の言葉につられて、「ほんとだわ」

と、吉子さんは正面から風を受けた桜の花のような笑顔をつくった。肩にたれた艶やかな髪がゆれた。額の髪は眉の少し上で一直線に切りそろえている。少女のような黒い瞳とふくらしたサクランボのような唇が、透きとおった白い肌を強調していた。名古屋で踊りの師匠をしている

夢子さんの母親が、四年前、孫にあたるしのぶちゃんの誕生祝いに贈ってくれた市松人形を、知的な細おもてにした顔立ちだった。しかし、苦楽利氏がそれと気づかぬまま深く魅了されていたのは、吉子さんの美貌ではなく、その背後にある精神の微妙なアンバランスであった。

「比叡トーピア六の七の四って、おっしゃったでしょ？ 東京の感覚でタクシー代を考えたものですから、お宅は比叡山の見えるマンションだとばかり思い込んでいましたら、料金メーターが二千円に近づくにつれて、どんどん山の中へはいっていきますでしょ？ 運転手さんは無口でこわそうな方ですし、わたくし、もう怖ろしくって。人家はないし、歩いている人も見当たらないし、いっそのこと有り金全部を差し上げて、京都駅まで返して下さいって叫ぼうかと思いましたの。そのときなんです。オープン・セサミって声がどこか遠くで聞こえたかと思うと、目の前の小山が突然二つに割れてモダンな住宅街が現れましたの。一瞬、幻覚かと思いましたわ。でも、現実なんです。住宅街のうしろには、もう山がなくて、青い空だけでしょ？ ずうっと坂道を登ってきたと思っていたのに、わたくし、いつの間にか東山を越えて琵琶湖の方に降りてしまったんだって錯覚して、からだ中に鳥肌が立ちましたわ。もう一つ別の世界に迷い込んだ感じ、分かりますでしょ？ フランス映画を見ているうちに、ふと気づいたらあたりがシャンゼリゼになっていたり、空想していたことが現実の世界になったりする体験、ありますでしょ？ わたくし、自分がどうにかなってしまいそうな怖ろしい気分でしたわ。タクシーが住宅地にはいって比叡山が大きく見えてくるまで、自分の勘違いに気づきませんでしたの。だって、山のとっぺんにお住まいがあるなんて、ひと言もおっしゃってくれなかったんですもの、仕方ありませんでしょ？」

そう言った吉子さんの目は恐怖を追体験してか涙ぐんでさえいたが、苦楽利氏にはそれが恍惚